

## だんだん良くなる有機農業

『有機農業がひろく可能性』（中島・大山・石井・金, 2015, ミネルヴァ）第1章4 83~86

私の専門は総合農学・農業技術論で、長いこと農の現場を歩くことを仕事としてきた。有機農業とはじめて出会ったのは1974年の夏で、場所は山形県高畠町だった。そこでは農業青年たちが、青年団を主な場として、農家と地域が進むべき道として、小規模複合経営と有機農業について熱く語り合い、実践的挑戦を始めた頃だった。彼ら彼女らのみなぎる熱意に深く感銘した。

それから40年、ずいぶんあちこちの農家を訪ね、丹精込めた田畑や作物・家畜の様子を見せていただいていた。

そこには苦難の場面も、豊饒の場面もあった。各地で見聞したさまざまな農の姿を振り返り強く感じるのは、有機農業は年々の積み重ねの中で、変化し、成熟していく営みだということだ。

土はだんだん良くなり、作物や家畜の育ちも自然な健康さが基本になるようになり、周囲の自然との調和もだんだん良くなっていく。もちろん作柄の変動はあり、豊作もあるが、うまくいかない年もある。圃場による違いもかなりある。だから、その時その時の評価としては、成功もあれば、失敗もある。しかし、たとえば10年くらいの時間軸をとってみれば、成功の取り組みも、失敗の取り組みも、いずれも農の歩みとして蓄積され、落ち着いた成熟が感じられるほどになっている。

有機農業以外の農の現場の様子と対比してみると、これはかなり特異なことだ。もちろん、有機農業以外の現場でも「成熟」を実感することはある。しかし、それは「いつでも」という訳ではない。一方、有機農業では「成熟」はあまり例外はなく、ほぼ「いつでも」なのだ。

各地を歩きながら、この「成熟」はどういう事なのだろうかと考えてきた。農家が暮らしをかけて、思いを込めて取り組んでいるのだから、そこには発見もあり、技術が向上していくのも確かだ。しかし、どうも有機農業における「成熟」、平たく言えば「だんだん良くなっていく有機農業の姿」には、そうした技術向上、技法確立とすることだけでは語りきれないものがあるようなのだ。「成熟」は、経験豊富な老練の農家についてだけでなく、新規参入の若い有機農家でも感じられる。それは「有機農業の世界が次第に開かれていく」とでも表現したくなるような様相なのだ。

昨年夏、福島県二本松市の新規参入農家の圃場視察会に参加し、若い新百姓たちの圃場を巡回した。畑の状態、作物の状態はそれぞれかなり違っていた。一緒に歩きながらこれからの手入れはどうしたら良いのか、打つべき手は何かなどを語り合った。その折りに何より驚いたことは、新規就農8年のSさんの畑の様子だった。若い新百姓でも8年も頑張ればと畑はこんなに変わるのかと強く感銘した。技術も磨かれ、作柄もそこそこに良いのだが、

それより何より畑の様子が落ち着いているのだ。

8年前に借りた畑の状態は酷かったらしい。日照り時にはカラカラに乾いて土はカチカチになり、少し雨が続けば畑はドブドブで、長靴がもぐってしまう状態だった。たちの悪い雑草の繁茂もすごかったらしい。それが化学肥料や農薬を使わず、自然を大切にしながら堆肥や刈草を入れて5、6年経つ頃から、日照りにもそれなりに強く、雨が降っても畑がぬかるむことがなくなり、雑草草生も穏やかになり、作物の作柄も次第に安定してきたというのだ。

禅問答のような言い方になるが、有機農業はたしかに一つの技術のあり方なのだが、どうもそれは単なる技術やその集合ではないようなのだ。それは「一つの世界が開かれる」とでもいうべきことのようなのだ。お解りいただけるだろうか。